



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	移動的な社会としての占領期日本に関する観光学的考察 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	遠藤, 理一
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第14222号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79892
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Riichi_Endo_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：遠藤 理一

審査委員	主査	教授	清水	賢一郎
	副査	教授	山田	義裕
	副査	教授	西川	克之
	副査	准教授	奈良	雅史(国立民族学博物館)

学位論文題名

移動的な社会としての占領期日本に関する観光学的考察

本論文は、一般に日本における観光の空白期と見なされてきた敗戦後の「占領期」に焦点をあて、この時期をあえて「移動的な社会」の一つの典型例として再定位する意想外の独創的視点から、占領改革が行われる過程で、人々の移動・接触と観光業による人々や場所の管理との間でせめぎ合いが演じられた歴史的様相を詳細に跡づけるとともに、観光の実践とその経験が人々になにをもたらしたのか、観光という営みがもった社会的意義を明らかにしたものである。

占領期日本は世界史上稀有なほど理想的な、平和主義・民主主義社会の構築が目指された時期として学界の注目を集め、それゆえ占領改革あるいは日本の人々が自ら「主体的」に取り組んだ「草の根の占領改革」が前景化されてきた。一方、近年、GHQ の検閲下にあった当時の米国政府文書や軍の公文書の機密解除・公開を契機として、米国の帝国としての覇権や、占領改革の理念からこぼれ落ちるような日本の人々の姿に着目する実証的研究が進められ、一定の成果を上げつつある。そうした先行研究を踏まえながらも本論文は、これまでの「草の根の占領改革」論に見られた偏り、すなわち、日米の軍事的・政治的・文化的エリートが定義する「占領改革」のみが取りあげられ、また「日本の人々」のみが対象とされてきた問題性を指摘した上で、占領改革と関わりをもった広範で多様な主体のコミュニケーション過程それ自体を辿るという方法的視座から、あらためて占領期日本における「移動的な」人々の実践と「観光」の経験の社会的意義を明確に浮かび上がらせている。

論文全体は 2 部構成をとり、序章で自身の理論的視座をモビリティ論、権力論、パフォーマンス論そして他者論の学的系譜に定めた上で、第 1 部「占領改革における観光業の役割と人々の実践」では、観光が連合軍兵士の心身管理の「生権力」システムとして、また日本が平和国家・文化国家として「復興」を遂げるための国策

として活用された様相を克明に記述した。続く第2部「日米の人々の観光実践と観光経験」では、米軍兵士やその家族、あるいは当時の日本人の観光行動と出会いについて独自の資料調査を行い、占領期日本における「移動的」な人々の実践と精神のドラマを浮き彫りにした。そうして結論部では、「体験」と「経験」とを峻別する藤田省三の戦後日本に関する「精神的考察」を参照して「観光体験」と「観光経験」という新たな対概念を提案し、それを通じて、第1部で議論した「社会システムとして観光」のあり方を「観光経験」の議論、特に Richard Rorty の「根無し草的つながり (rootlessness)」という概念を援用することで相対化している。そこでは日米の人々の観光実践がいわゆる上からの占領改革とは異なる意味を生み出していたこと、そして人々の観光経験は占領改革に孕まれた自文化中心主義とは別の位相で、占領改革やその理念を他者のまなざしから異化し、問い直すようなモメントをもたらし、日米の人々のあいだに観光実践と観光経験を通じて、信念やイメージ、アイデンティティの偶然性 (contingency) が浮かび上がる「根無し草的つながり」が形成されていたことを指摘し、ここにこそ占領期日本社会における日米の人々の、観光をめぐる実践と経験の社会的意義があったと結論づけている。

本論文は実証研究の側面で、米国国立公文書館をはじめ、米国内や日本国内各地の図書館、公文書館等に所蔵される膨大な史料を渉猟し、米国のメディア報道や連合軍将兵の紀行を収集して丹念に読み込み、それを観光の観点から分析的に記述した点で、資料的価値が非常に高い。また、そうした厚い記述を通じて、占領期日本社会の新たな相貌を生き生きと描き出した点、さらに、観光という営みそれ自体が恐らく本来的にもっている、二律背反的な2つの特性のせめぎ合いというダイナミズムが、まさに占領期日本における観光に顕著に見られることを実証的に示した点は、本論文の独創的な洞察として高い価値をもつものと評価できる。

一方で、口頭試問及びその後の審査会議では、近代化をやや単線的に捉えている嫌いが見受けられる点や、コンタクトゾーンを日米のアクター間に限定的に措定していることで、やや静態的な二項対立図式になっているとの意見が出された。また、日米のアクター間に存在した観光経験の質的相違を、両者のモビリティそれ自体の非対称性を考慮に入れて分析することで、より多様な〈あいだ〉で生成的に展開していた観光のダイナミズムを描き出す可能性も指摘された。しかしながら、いわば占領期日本に関する実証的な歴史社会学的研究と観光経験の思想論的研究との架橋に挑戦した、浩瀚かつ意欲的な研究として既往研究を超える達成を示した本論文の意義は大きい。

以上から、審査委員会では博士（観光学）学位の授与に値するものとして、本論文を合格と判断した。